

ヤングケアラー実態調査に関する報告書

令和6年2月

**栗山町福祉課
栗山町教育委員会**

I. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は、令和5年度における栗山町内のヤングケアラーの実態を把握し、前回調査結果と比較することで、その現状や課題、ニーズなどをより詳細に把握し、今後の支援体制の構築や新たな社会資源を開発するための基礎資料として実施した。

(2) 調査対象

栗山町内の小学校5年生及び6年生、中学校全学年、高校全学年、北海道介護福祉学校全学年による全数調査を実施した。

(3) 調査方法

各学校に調査票を配布又はWebフォームにて調査を実施し、調査結果を回収した。

(4) 調査時期

令和5年11月～12月

(5) 回収結果

①小学校・中学校・高校

対象数 529件 回収数 448件 回収率 84.7%（有効回答数 448件）

学校/項目	対象数	回収数	有効回答数	回収率
栗山小学校	125	123	123	98.4%
角田小学校	21	21	21	100%
継立小学校	17	17	17	100%
小学校全体	163	161	161	98.8%
栗山中学校	253	221	221	87.4%
栗山高校	113	66	66	58.4%
合計	529	448	448	84.7%

②北海道介護福祉学校

対象数 42件 回収数 33件 回収率 78.6%（有効回答数 30件）

(6) 回答者属性

①学 年

回答者の学年と回答数は下記のとおりとなった。

設問：あなたの学年を教えてください。

学 校	5 年 生	6 年 生	無回答	合 計
小学校	81	79	1	161

学 校	1 年 生	2 年 生	3 年 生	無回答	合 計
中学校	92	71	58	0	221
高 校	43	20	3	0	66

学 校	1 年 生	2 年 生	合 計
介護福祉学校	12	18	30

②性 別

回答者の性別構成は、中学校、高校共に女子（女性）が男性よりも 16 ポイント以上多い結果になった。

学 校	男子(男性)	女子(女性)
中学校 n=221	41.6%	58.4%
高 校 n=66	31.8%	68.2%
介護福祉学校 n=30	33.3%	66.7%

(6) 報告書について

- ①集計は小数点第二位を四捨五入している。そのため回答比率の合計は必ずしも 100%にならない場合がある。
- ②二つ以上の回答を可能にした複数回答の場合は、その回答比率の合計は 100%を超える場合がある。
- ③数表、図表、文中に示す N は、比率算出上の基数（標本数）である。全標本数を示す「全体」を「N」とし、「該当数」を「n」で表記する。
- ④調査票のうち、性別を回答する項目に、小学校の Web フォーム設定に誤りがあったことから、小学校の調査のうち、性別に関わる項目に関しては、本報告には不計上とする。
- ⑤報告書でいう「ヤングケアラー」は、18 歳未満の子どもとし、「若者ケアラー」は「18 歳以上 30 歳未満」の「若者」を対象として、その性質から集計を区分している。そのため、「若者ケアラー」の表記は、北海道介護福祉学校の回答者であり、そのうち 10 代から 20 代までの回答を採用しているため、同校の回収数と調査結果を算出するにあたってのサンプル数は一致しない。
- ⑥報告書でいう前回の調査結果とは、令和 4 年 11 月に本町で行われたヤングケアラー実態調査を指す。詳細は、『ヤングケアラー実態調査に関する一次分析報告書』（栗山町・栗山町教育委員会 令和 4 年 12 月）を参照。

Ⅱ 調査結果

(1) ヤングケアラーにおける総数

栗山町におけるヤングケアラーの総数は 33 名で、全体の 7.4%となった。昨年度の調査結果から見て、3.6 ポイント高い結果になった。

学校別で見ると小学校が 9.3%。これは全道平均 4.7%と比べると 4.6 ポイント高く、全国平均 6.5%（対象：小学 6 年生）から見ても 2.8 ポイント高い。中学校では 7.6%になった。これは、昨年度の調査結果から見て、3.6 ポイント高い。全道平均（対象：中学 2 年生）7.2%と比べて 0.4 ポイント高く、全国平均（対象：中学 2 年生）5.7%からは 1.9 ポイント高い。高校では 1.5%。全道平均（対象：全日制高校 2 年生）5.8%と比べて 4.3 ポイント低く、全国平均 1.5%からは 2.6 ポイント低い結果となった。

今回より介護福祉学校を調査したが、全体の 10.0%が若者ケアラーになった。これは、大学生と比較して全道平均の 3.3%と比べると 6.7 ポイント高く、全国平均から比べると 7.5 ポイント高い。

所属	サンプル数	ヤングケアラー		合計	%	(参考) 北海道	(参考) 全国
		(町内)	(町外)				
栗山小学校	123 人	5 人	0 人	5 人	4.1%		
角田小学校	21 人	3 人	0 人	3 人	14.3%		
継立小学校	17 人	7 人	0 人	7 人	41.2%		
小学校全体	161 人	15 人	0 人	15 人	9.3%	4.7%	6.5%
栗山中学校	221 人	17 人	0 人	17 人	7.6%	7.2%	5.7%
栗山高校	66 人	1 人	0 人	1 人	1.5%	5.8%	4.1%
全体	448 人	33 人	0 人	33 人	7.4%		
所属	サンプル数	若者ケアラー		合計	%	(参考) 大学生 北海道	(参考) 大学生 全国
		(町内)	(町外)				
介護福祉学校	30 人 (33 人)	2 人	1 人	3 人	10.0% (9.1%)	3.3%	2.5%

※介護福祉学校の（）は 30 代以上の学生を含めた数値

(2) 性 別

ヤングケアラー・若者ケアラーの性別構成は、中学校で「男子」35.3%、「女子」64.7%になり、高校・介護福祉学校ともに対象者の全てが「女子」と回答した。昨年に引き続き、ヤングケアラーは、女子が家族のケアを担う傾向にあることがわかった。

* 設問：あなたの性別を教えてください。

性別\学校	中学校 n=17	高 校 n=1	介護福祉学校 n=3
男子(男性)	35.3%	0%	0%
女子(女性)	64.7%	100%	100%

（３）同居家族の属性

同居家族の属性を見てみると、小中学校全体では「母親」が最も多く 94.4%であり、「父親」79.7%、「きょうだい」79.2%となった。ヤングケアラーも同様の傾向にあるが、全体と比較すると、「きょうだい」は 93.9%と 14.7 ポイント高く、ヤングケアラーは「きょうだい」と同居している傾向がある。

*** 設問：あなたが一緒に住んでいる人を教えて下さい。（複数回答）**

回答／件数	小中高校全体 N=448	%	ヤングケアラー n=33	%	介護福祉学校 N=30	%	若者ケアラー n=3	%
1人暮らし					15	50.0%	0	0%
母親	423	94.4%	33	100%	7	23.3%	1	33.3%
父親	357	79.7%	27	81.8%	4	13.3%	0	0%
きょうだい	355	79.2%	31	93.9%	6	20.0%	1	33.3%
祖母	84	18.8%	7	21.2%	2	6.7%	1	33.3%
祖父	65	14.5%	6	18.2%	0	0%	0	0%
その他	20	4.5%	0	0%	7	23.3%	1	33.3%

（４）ケアの対象者

ヤングケアラーのケアの対象者を尋ねると、「きょうだい」が最も多く 75.8%。次に「祖父」が 9.1%という結果になり、ヤングケアラーは「きょうだい」の世話をを行うケースが多いことが分かった。

* 小中高校設問

あなたがお世話をしている人がいれば、すべて教えて下さい。

* 介護福祉学校設問

現在、家族の中で、あなたがお世話をしている人（高齢や病気、身体が不自由、きょうだいの面倒を見る）がいますか。（同居・別居は問いません）

回 答	ヤングケアラー 件数 n=33	%	若者ケアラー 件数 n=3	%	北海道（参考）			
					小学校	中学校 (2学年)	高校 (全日)	大学
きょうだい	25	75.8%	1	33.3%	47.2%	38.8%	28.5%	32.4%
母親	2	6.1%	1	33.3%	8.7%	4.7%	7.9%	47.1%
祖父	3	9.1%	0	0%	19.9%	3.7%	4.5%	11.8%
祖母	2	6.1%	2	66.7%	27.0%	8.2%	10.1%	23.5%
父親	2	6.1%	0	0%	5.1%	1.7%	2.2%	17.6%
その他	0	0%						
無回答	0	0%						

（５）ケアの理由

ヤングケアラーにケアの理由を尋ねると、最も多いのが「まだ小さい（幼い）ため」という回答が最も多く 75.8%になった。次に「身体や心などに「障がい」があるため」と「病気やけがのため」が 6.1%という結果になり。高齢や、認知症を理由はそれぞれ 3.0%になった。

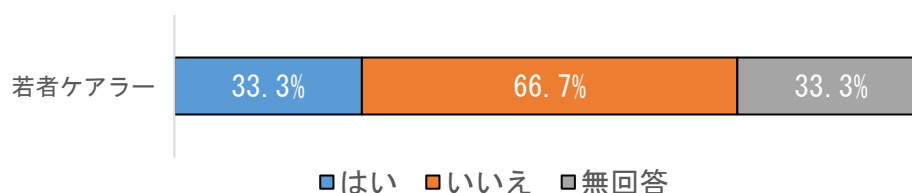
*** 設問：あなたがお世話をしている理由を教えてください（複数回答）**

回 答	ヤングケアラー 件数 n=33	%	若者ケアラー 件数 n=3	%
まだ小さい（幼い）ため	25	75.8%	0	0%
身体や心などに「障がい」があるため	2	6.1%	1	33.3%
病気やけがのため	2	6.1%	1	33.3%
高齢（65 歳以上）のため	1	3.0%	2	66.6%
認知症（物事を覚えられない、忘れてしまう）ため	1	3.0%	0	0%
食事や服を着たりすることが、自分一人では、できないため	0	0%	0	0%
お酒などを止められなくなっているため	0	0%	0	0%

（６）アルバイトの有無

高校生のヤングケアラー及び介護福祉学校の若者ケアラーに、病気や障がいを持つ家族がいることで、家計を支えるためにアルバイトをしているかを尋ねたところ、高校生では該当者がなく、若者ケアラーは、33.3%（回答者 3 人中 1 人）が、家計を支えるためアルバイトをしているという結果になった。

*** 設問：病気や障がいを持つ家族がいることで、あなたは家計を支えるためにアルバイトをしていますか。**

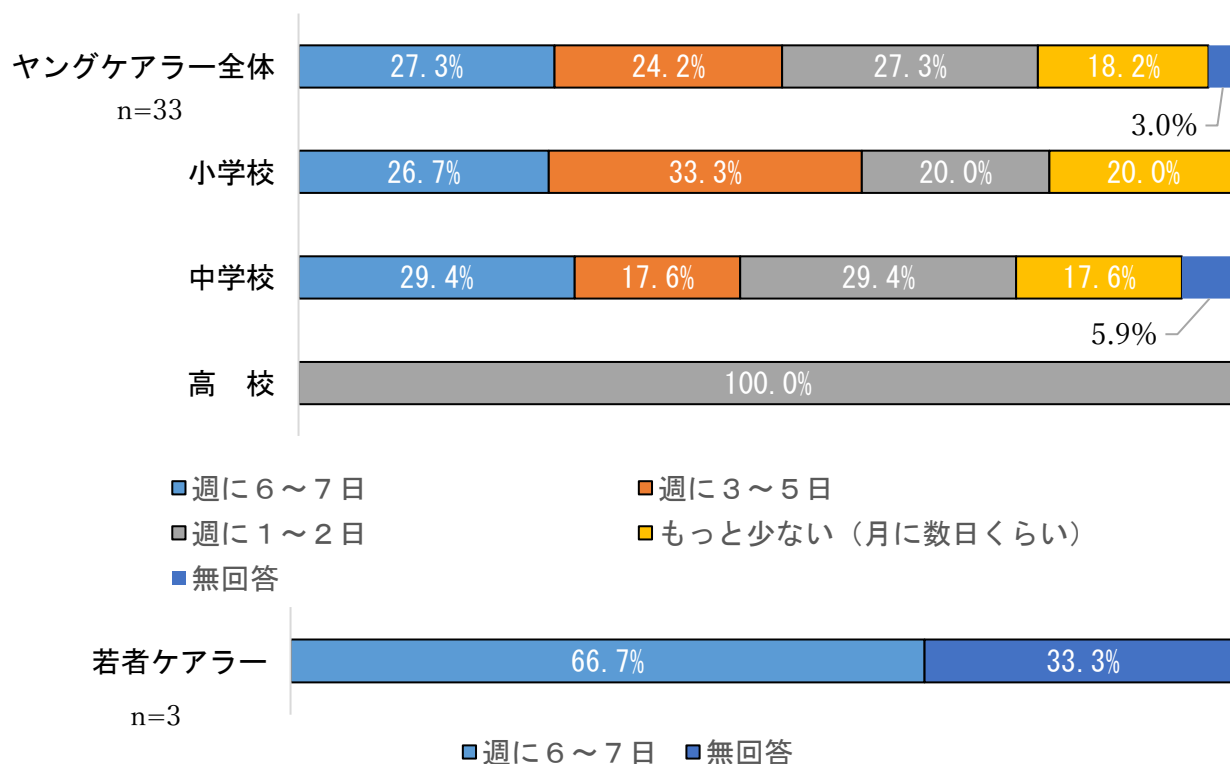


（７）ケアの日数と時間

ヤングケアラーの家族をケアする日数について、一週間のうちの日数を尋ねると 27.3%が「週に 6 ～ 7 日」と、ほぼ毎日ケアを行っている回答道し、若者ケアラーでは、66.7%が同様の回答をした。

具体的なケア時間¹では、登校日の場合、「わからない」と回答した者が30.3%、その日によって違う、「その日によってずいぶん違う」が33.3%になり、休校日の場合は、「わからない」と回答した者が36.4%、「その日によってずいぶん違う」が24.2%となり、登校日では63.6%、休校日では60.6%のヤングケアラーが、ケアによる明確な時間を出すことが難しいとの回答し、前回の調査同様、ケア時間を掴みにくいという実情が明らかになった。

*** 設問：あなたがお世話している日数を教えてください。**



注1 ケア時間に関しては、具体的な時間を回答した者は、登校日は1時間未満の回答が6件、1時間以上2時間未満が1件、2時間以上4時間未満が1件の回答だった。また、休校日では1時間未満の回答が6件、1時間以上2時間未満が2件、2時間以上4時間未満の回答が1件だった。

(8) ケアを始めた年齢

ヤングケアラーにケアを始めた年齢を尋ねると、小学校、中学校、高校とケアの開始年齢が上昇する傾向になった。平均は9.5歳であり、昨年同様、小学校中学年頃から家族のケアを担い始める傾向にある。また、介護福祉学校では、13.6歳と年齢が高い結果となった。

*** 設問：お世話は、あなたが何才くらいの頃から、していますか。**

設問／学校	小学校	中学校	高校	平均	介護福祉学校
() 才くらいの頃から	8.3	11.5	14.0	9.5	13.6

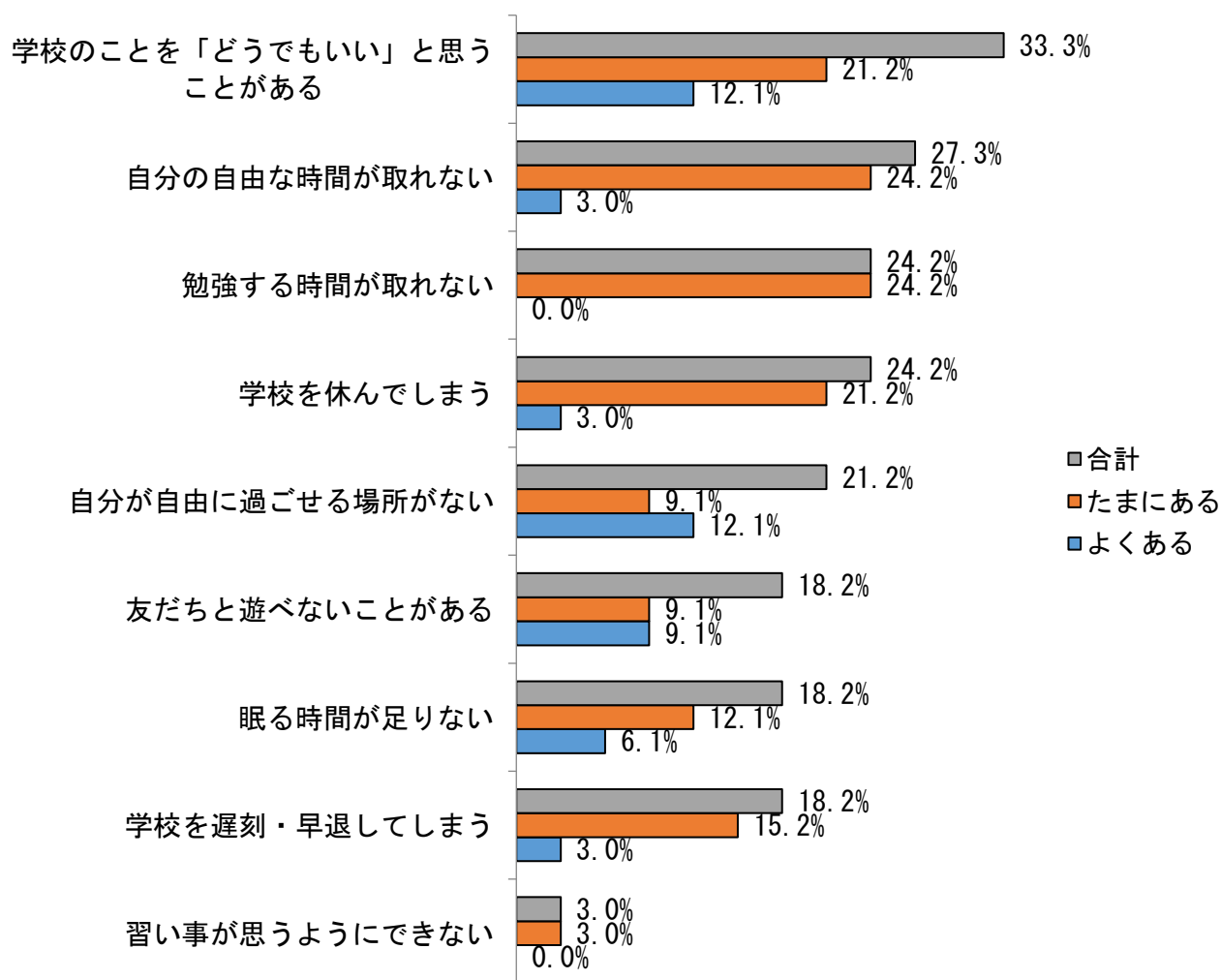
(9) ケアによる生活の影響

家族のケアを行うことで、ヤングケアラーの生活にどのような影響があるのかを尋ねたところ、「学校のことを「どうでもいい」と思うことがある」が33.3%と多く、前回調査と比べて9.5ポイント（前回調査値23.8%）高い結果になり、学業に集中できない傾向にあることがわかった。続いて、「自分の自由な時間が取れない」が、27.3%（前回調査値42.9%）、「学校を休んでしまう」24.2%（前回調査値28.6%）と「勉強する時間が取れない」（前回調査値33.3%）が24.2%になり、生活や学業に大きな影響を与えているが、特に生活面での回答が多くまた、回答が平準化している傾向になった。

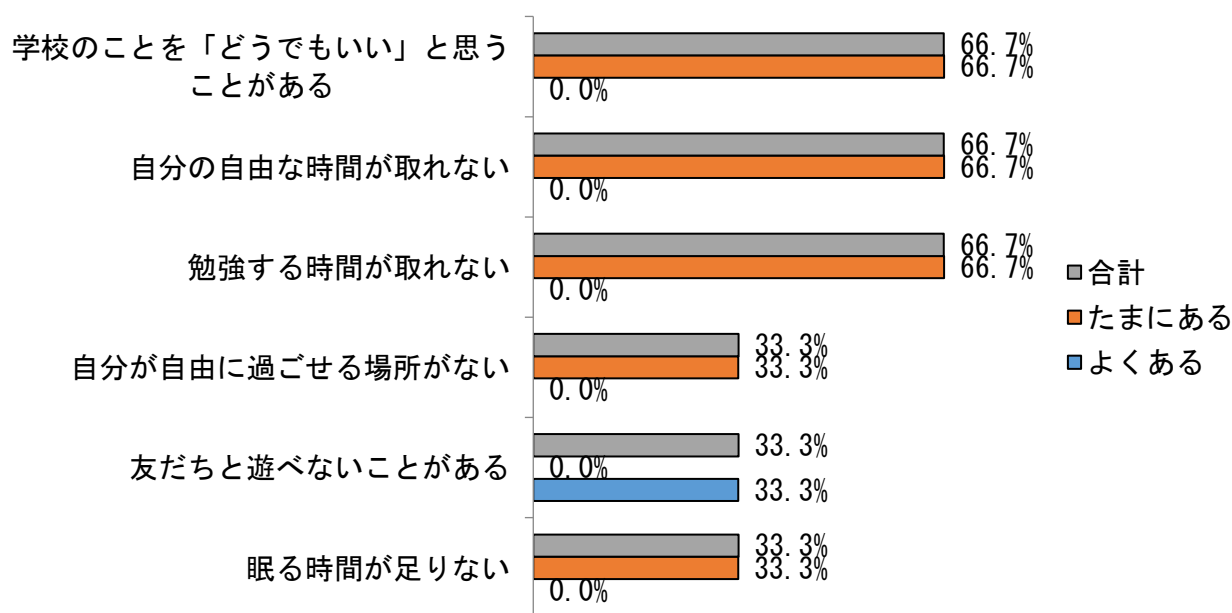
若者ケアラーの場合は、「勉強する時間が取れない」、「自分の自由な時間が取れない」、「学校のことを「どうでもいい」と思うことがある」が66.7%（3人中2人）の結果となり、ヤングケアラー同様に、生活や学業に大きな影響を与えていることがわかった。

*** 設問：あなたは、お世話をされていて、次のようなことはありますか。当てはまる番号のすべてに○をつけてください。（複数回答）**

ヤングケアラー（n=33）



若者ケアラー（n=3）



（１０）ケアの受け取り方

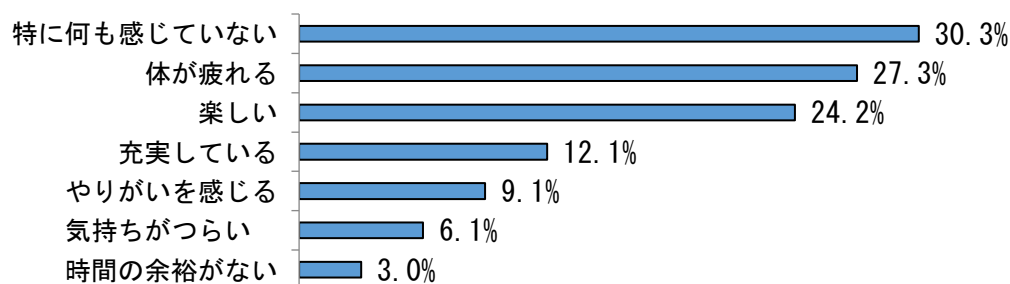
今回の調査では、「特に何も感じていない」と回答している者が最も多く、30.3%と前回調査と比べて14.0ポイント（前回調査値 16.3%）高くなった。日常的なケアにより、「体が疲れる」と回答した者が27.3%（前回調査値 47.6%）、「時間の余裕がない」と回答した者が3.0%（前回調査値 47.6%）とケアのための疲労感はあるものの時間的な制約を受ける者が少ない結果になった。また、そのケアが「楽しい」が24.2%（前回調査値 44.5%）、「充実している」が12.1%（前回調査値 23.8%）という回答も多いものの、前回調査と比べて低い結果となった。

このことから今回の調査対象のヤングケアラーでは、ケアに対しては、日常的に行われているために違和感や気づきにくい傾向がある一方で、身体上のストレスを持つ子どもやの自己肯定感や目的意識を持つ傾向が一定数あることがわかった。

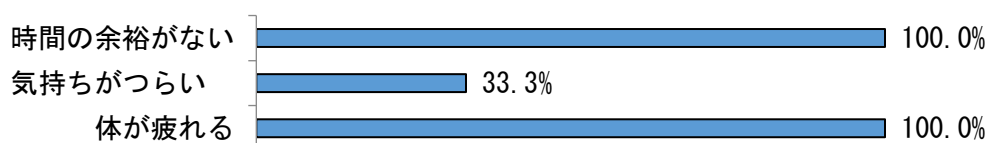
これを若者ケアラーとで見ると、すべての回答者が「体が疲れる」、「時間の余裕がない」と回答し、33.3%（3人中1人）が「気持ちがつらい」と心身上のストレスを抱えていることがわかった。

*** 設問：あなたは、お世話をされていて次のことを感じますか。（複数回答）**

ヤングケアラー（n=33）



若者ケアラー（n=3）



（１１）相談の有無及び対象

ヤングケアラーは、ケアのことの相談を他者に行うことが少なく 78.8%になり、「ない」と回答した者が前回調査よりも 7.4 ポイント高い（前回調査値 71.4%）結果になった。相談先が、「ある」と答え、相談先の回答があった 3 人の内訳は「家族」が 2 件、「友だち」は 1 件であり、学校や相談支援機関に相談した例は昨年同様になかった。なお、若者ケアラーは、家族や学校、相談支援機関に相談したケースはなかった。

ヤングケアラーの相談していない理由は、「誰かに相談するほどの悩みではないから」が 65.4%と大きな悩みとして感じていない、または気づいていないという回答が半数以上を占め、前回調査と比べて 12.1 ポイント高い（前回調査値 53.3%）結果になった。次に、「相談しても、何も変わらないから」が 19.2%（前回調査値 33.3%）になり、前回調査と同様の傾向にあるもののポイントは低下した。

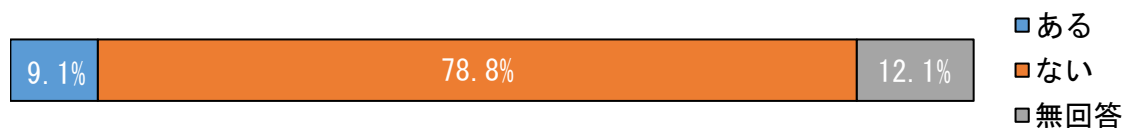
若者ケアラーの場合は、全ての回答者（3 人）が「相談する相手を困らせたくないから」、「自分の家族のことなので話しにくいから」と相談相手を配慮するケースや、個人的なことで話すことをためらう回答があった。また、「相談対象がいらない」、「わからない」、「話すほどのことではない」という回答もそれぞれ 33.3%（3 人中 1 人）あった。

今回の調査結果では、前回調査と比べてヤングケアラーがケアに関する相談をしても、自身の生活環境に変化はない、または変化を必要とする環境ではないと受け止めている傾向がある。また、ケアに関しては、個人的なこと、家庭内部のことであるという受け止め方は低い。また、相談しようとしても相談相手を配慮してしまうヤングケアラーも一定数いることがわかった。

しかし、ここで検討すべき点は、ケアすることがストレスになっている環境であっても、相談先がわからないために、本人の心身に影響を及ぼす深刻な問題に発展する恐れがあるヤングケアラーが、6.5 人に 1 人いることになり、外部に支援を求めたくても、具体的な方法がわからないヤングケアラーが存在する可能性があることである。よって、今後とも広報・啓蒙活動の必要性や、子どもが発信したくてもできない環境である可能性を考慮し、大人側の受信力を高める必要があることが改めてわかった。

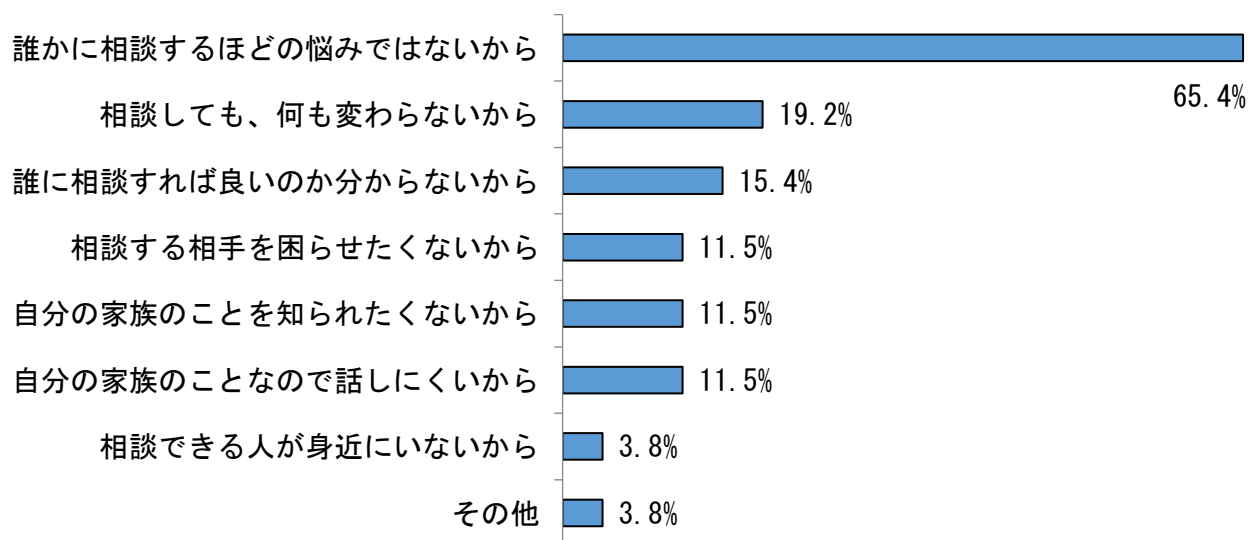
* 設問：あなたは、お世話の悩みを誰かに相談したことはありますか。

ヤングケアラー（n=33）

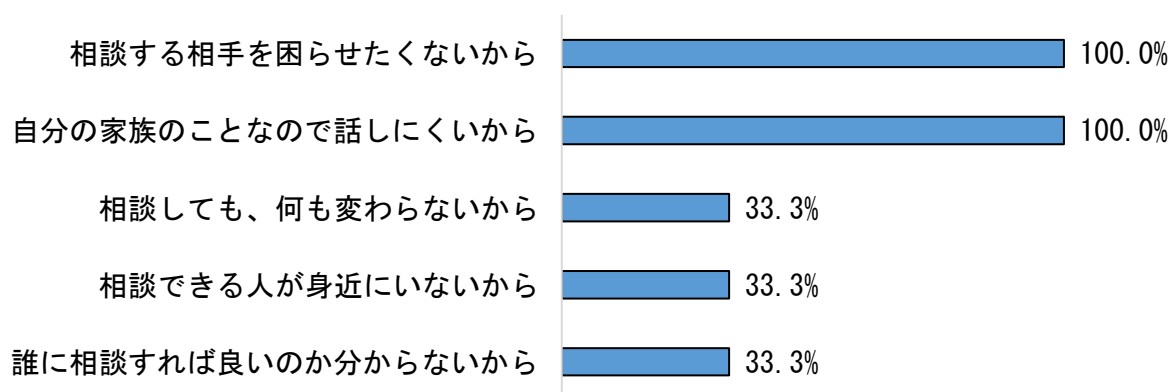


* 設問：相談していない理由を教えてください。

ヤングケアラー（n=33）



若者ケアラー（n=3）



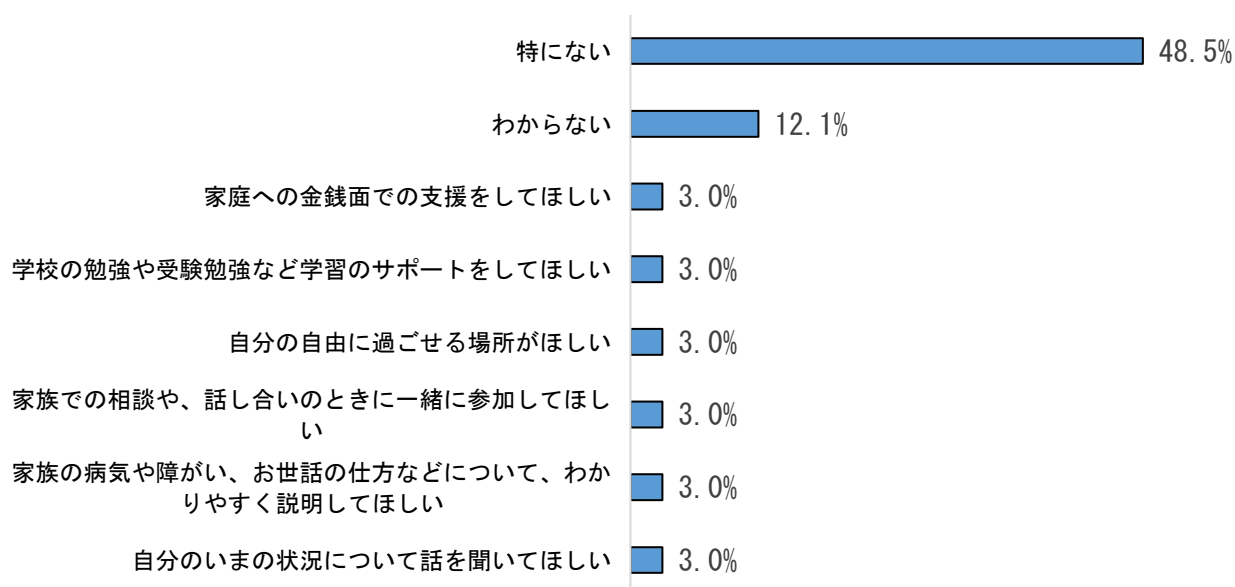
（１２）ケアに関して支援してほしいこと

ヤングケアラーがケアを行っている中で、支援してほしいことは何か尋ねると、「特にない」が 48.5%、「わからない」が 12.1%と、前回の調査結果同様、具体的にイメージが付きにくい、支援を受けるほどのケア内容ではないと感じている傾向があることがわかった。その他の回答では、学習面でのサポートや病気への理解、自由な居場所などの回答がそれぞれ 3.0%あったが、小学校のヤングケアラー回答者において、家庭への金銭的な支援を求める回答があり、小学生 5～6 年生の段階で、経済事情が本人のストレスになりうるということがわかった。

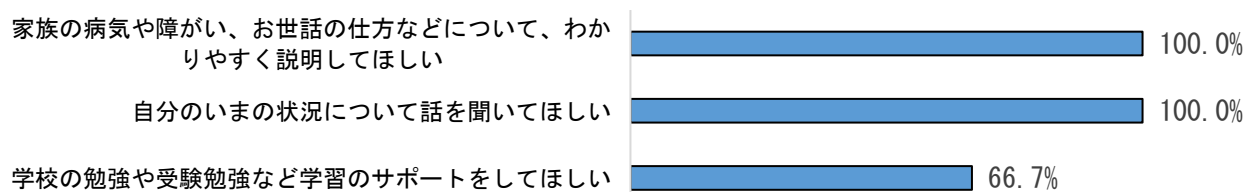
若者ケアラーでは、全ての回答者（3 人）において、自分自身、ケアの対象者の病気を理解することを求めるのに併せて、話を聞いてほしいと回答する結果になった。このことから、若者ケアラーには相談した対象が今までおらず、話を聞いてほしいが、話す対象がいらない、わからない、または、個人的なことのたためらってしまうという問題にもつながる可能性があり、支援側がどのようにヤングケアラーの声をキャッチするかが課題であることがわかった。

*** 設問：あなたは、お世話していることに関して、学校の先生や周りの大人に対して支援してほしいことはありますか。（複数回答）**

ヤングケアラー（n=33）



若者ケアラー（n=3）



（１３）今後のケア対象者の有無

今後、近いうちにケアの対象になる者がいるかどうかを尋ねたところ、「いない」と回答した者が小中高校全体の 78.6% になった。なお、ケアの対象者「いる」と回答した者³は 8.9% になった。その内訳は「祖母」が 6.9%、「祖父」が 4.5% となり、前回の調査結果とほぼ同様になった。

介護福祉学校では、「いない」と回答した者は、70.0% と、小中高校全体と同様に高い結果になった。一方で、「祖母」が 23.3%、「祖父」が 13.3%、母親が 10.0% の結果になり、介護福祉学校の性質は考慮すべき点だが、小中高校全体及び介護福祉介護福祉学校双方とも祖父母の高齢化に伴い、ケアをする可能性があると感じていることがわかった。

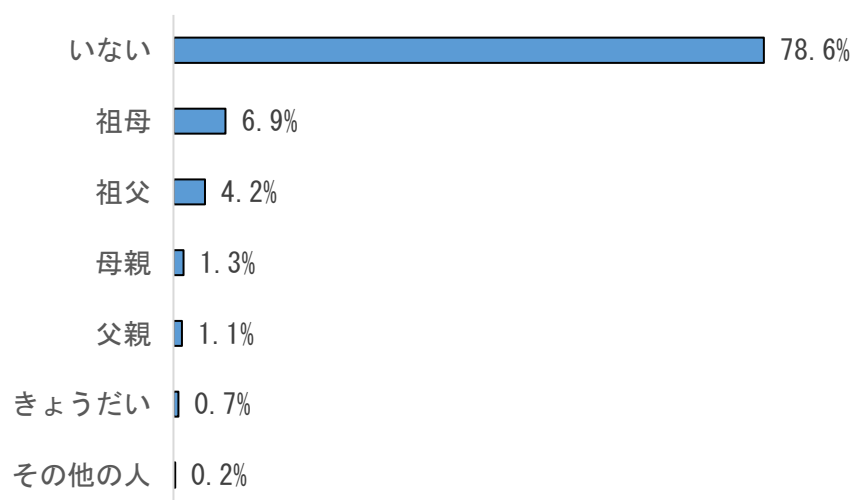
なお、ヤングケアラーを除いて、近い将来ケアをする可能性がある者をヤングケアラー予備軍として位置づけると、実数では、小学校では 14 名（8.7%）、中学校では 22 名（10.0%）、高校では、7 名（10.6%）になり、全体の 9.6% がヤングケアラー予備軍になることがわかった。これにヤングケアラーを合わせると 17.0% となり、前回調査による二次分析結果⁴とほぼ同様の結果になった。このことから、ヤングケアラー及びその予備軍は、30 人学級計算で 5.1 人と一定数存在することから、いつ支援が必要になるかわからないことを鑑み、日頃から見守り・支援活動が必要になることが明らかになった。

なお、若者ケアラーも、ヤングケアラー同様にその予備軍を位置付けると、4 人（13.3%）が予備軍になることがわかった。これに若者ケアラーを合わせると、23.3% になり、学生の約 4 人に 1 人は、現在ケアをしている又は、今後ケアをするリスクを抱えていることが明らかになった。

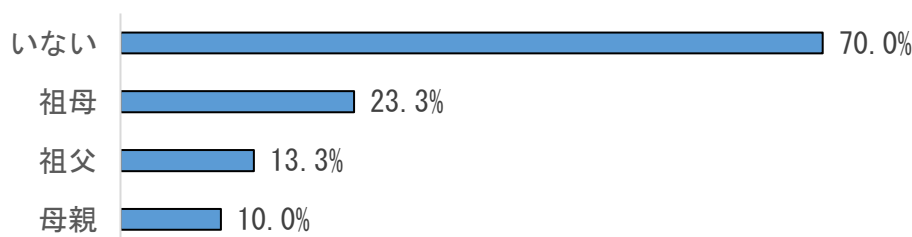
また、ヤングケアラー及び若者ケアラーのうち、ダブルケアなど近い将来ケアをする可能性がある者は、ヤングケアラーでは、5 人の 15.2% とヤングケアラーの 6.6 人に 1 人、若者ケアラーでは、回答者全て（3 人）が該当する結果になり、より一層、心身のストレスを抱える可能性が高いため、学業や生活に影響を及ぼすリスクが高いことが明らかになった。

*** 設問：近いうちに、お世話をする必要のある人がいれば、全て教えてください。（複数回答）**

小中高校全体（N=448）



介護福祉学校 (N=30)



注2 設問のうち、小中高校で「いる」と回答した者の実数は20人、無回答は47人の結果になった。

注3 設問のうち、介護福祉学校で「いる」と回答した者の実数は7人、無回答は2人の結果になった。

注4 前回調査による二次分析は、島根大学法文学部法経学科宮本恭子教授により行われた。詳細は、『栗山町ヤングケアラー二次分析結果報告書』を参照のこと。

(14) ケアへの不安

調査対象者のうち、小中高校で今後のケアが必要な可能性が「ある」と回答した者のうち、ケアをすることに不安があると回答した者は全体の25.6%となり、前回調査と比べて19.9ポイント（前回調査値45.5%）低下した。また、「ない」と答えた者は72.4%（前回調査値47.7%）となった。なお、「ある」と回答した者は、小学校31.3%、中学校27.3%、高校42.9%となった。

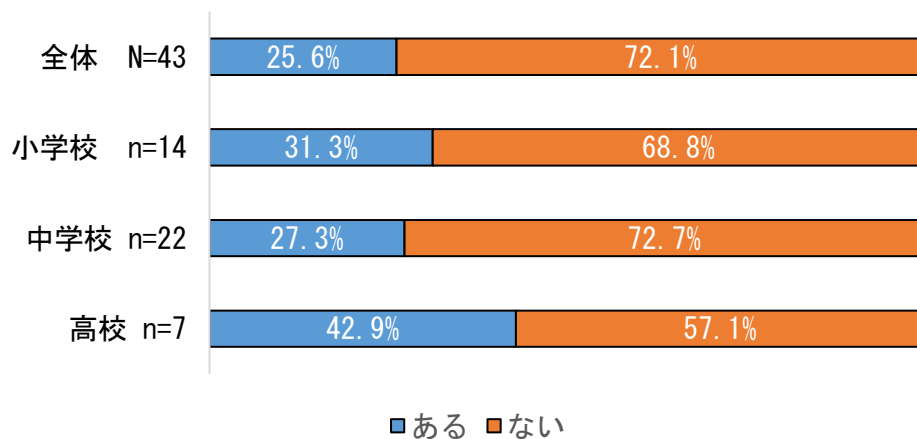
また、「ある」と回答した者に、その理由を尋ねると、「これからどうなるのかよくわからない」（前回調査値25.0%）と「自分の自由な時間が取れなくなるのではない」（前回調査値45.0%）が64.3%、「友だちと遊べなくなるのではない」（前回調査値20.0%）と「勉強する時間が取れなくなるのではない」（前回調査値15.0%）が57.1%、「眠る時間が足りなくなるのではない」（前回調査値30.0%）と「何をしたいのかわからない」（前回調査値55.0%）が35.7%になった。

この結果から、お世話をするに対しての不安は、具体的な生活や学業に不安感を持つ子どもたちや、先にある見えない不安や、具体的にイメージがつかないことへの不安など漠然な不安感を持つ子どもたちが、全体の半数を近いることが明らかになった。また、ダブルケアを含めて、将来に不安があるヤングケアラーは、5人中2人いる結果になった。

介護福祉学校では、今後のケアが必要な可能性が「ある」と回答した者のうち、ケアをすることに不安があると回答した者は全体の85.7%となり、大半の若者はケアすることへの不安感を持っていることが明らかになった。なお、若者ケアラーである回答者（3人）全てが、お世話することに不安があると回答した。

* 設問：お世話をすることに不安がありますか。

小中高校（N=43）

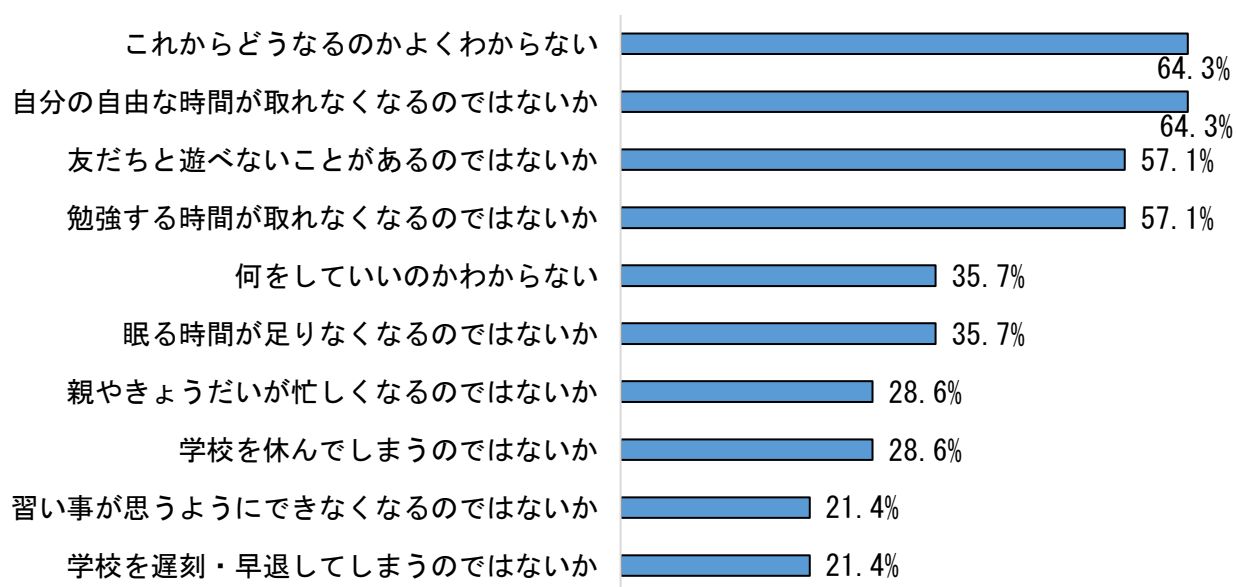


介護福祉学校（N=7）

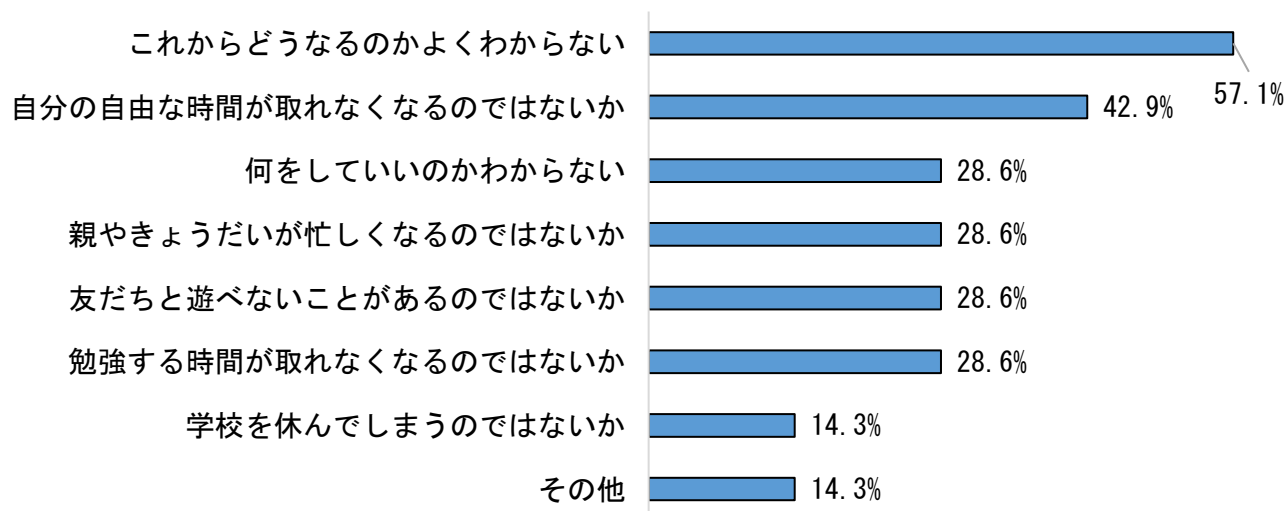


* 設問：お世話をすることを不安に思う理由は何ですか。（○の数は自由です）※複数回答

小中高校（N=45）



介護福祉学校（n=7）



（１５）ヤングケアラーの認知度

回答者全てに、「ヤングケアラー」の言葉の認知度を尋ねた。全体では、「聞いたことがあり、内容も知っている」が 37.7%と前回調査と比べて 6.7 ポイント低下した。「聞いたことがあるが、よく知らない」が 35.5%と 9.1 ポイント上昇し、73.2%の回答者が、「ヤングケアラー」の言葉自体を聞いたことがあるという結果になった。これは、前回の調査結果（前回 70.8%）とほぼ同様の数字になった。

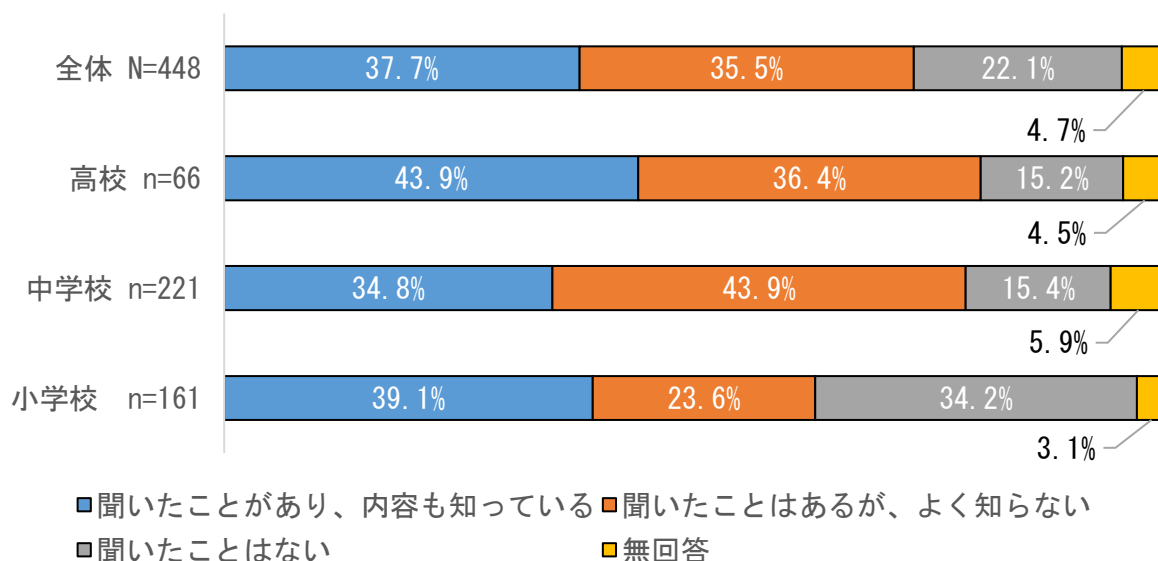
「ヤングケアラー」の言葉を耳にする子どもたちは増えている一方で、内容理解まで至らない子どもたちも全体の 40%弱にいたことがわかった。このことは昨年度より、本町においてヤングケアラー対策が本格的にスタートしているが、十分な結果が反映された結果とは言い難く、広報・啓発活動は今後とも継続的に進める必要がある。

学校別だと、言葉自体を耳にしている子どもたちは、小学校で 62.7%（前回調査値 58.1%）、中学校が 78.7%（前回調査比 74.7%）、高校が 80.3%（前回調査値 55.9%）と学年が上がるごとに、認知度が上昇した。

一方、ヤングケアラーに回答を絞り込むと、「聞いたことがあり、内容もよく知っている」が 38.1%、「聞いたことがあるが、よく知らない」が 9.5%であり、ヤングケアラーの言葉の認知度は、47.6%となった。これは全体と比べると、23.2 ポイント低い結果であり、昨年度同様にヤングケアラー自体は、その言葉に対しての認識が低い傾向にあることがわかった。

また、介護福祉学校に、ヤングケアラーの言葉の認知度を尋ねたところ、回答者全てが、ヤングケアラーの言葉を聞いたことがあると回答した。介護福祉学校の性質からも、カリキュラムで組み立てられており学習されている結果とも推測される。

* 設問：「ヤングケアラー」という言葉をこれまでに聞いたことがありますか。



（１６）生活での悩み事・困りごと

日常生活での悩み事を回答者全てに尋ねると、「特にない」が小中高校全体、ヤングケアラーともに最も高く、小中高校全体では 46.7%（前回調査値 52.0%）、約半数の子どもが生活上の悩みがない結果になった。特に、ヤングケアラーでは、57.6%（前回調査値 28.6%）になり、ケアする環境下ではあるが、生活上悩みを抱えていない、または意識していない生徒が半数以上になり、前回調査結果と結果が大きく異なることになった。これは、家庭内でケアを行っているものの問題として意識化できていない可能性があることを示唆している。

回答者のうち、悩みごとや困りごとを抱えている子どもを対象を絞ると、小中高校全体では、「将来（進路）のこと」が 17.2%（前回調査値 26.4%）、「学校の成績のこと」が 16.3%（前回調査値 20.9%）、「自分に自信が持てないこと」が 11.4%（前回調査値 19.8%）、「友だち関係のこと」が 9.4%（前回調査値 14.7%）と、前回調査と傾向は変わらないが、回答者の割合は減少している。回答者の割合の減少は、ヤングケアラーの場合は、顕著になった。

ヤングケアラーの回答者のうち、悩みごとや困りごとを抱えている子どもを対象を絞ると、「自分に自信が持てないこと」が 15.2%（前回調査値 28.6%）と最も多く、前回調査で回答者が多かった「将来（進路）のこと」（前回調査値 42.9%）、「学校の成績のこと」（前回調査値 52.4%）が 6.1%、「友だち関係のこと」（前回調査値 23.8%）も同様に 6.1%と軒並み大幅に下回るといった結果になった。これは、他の回答項目が前年度調査結果を下回るの、今回の調査結果ではほぼ同様の傾向が認められた。

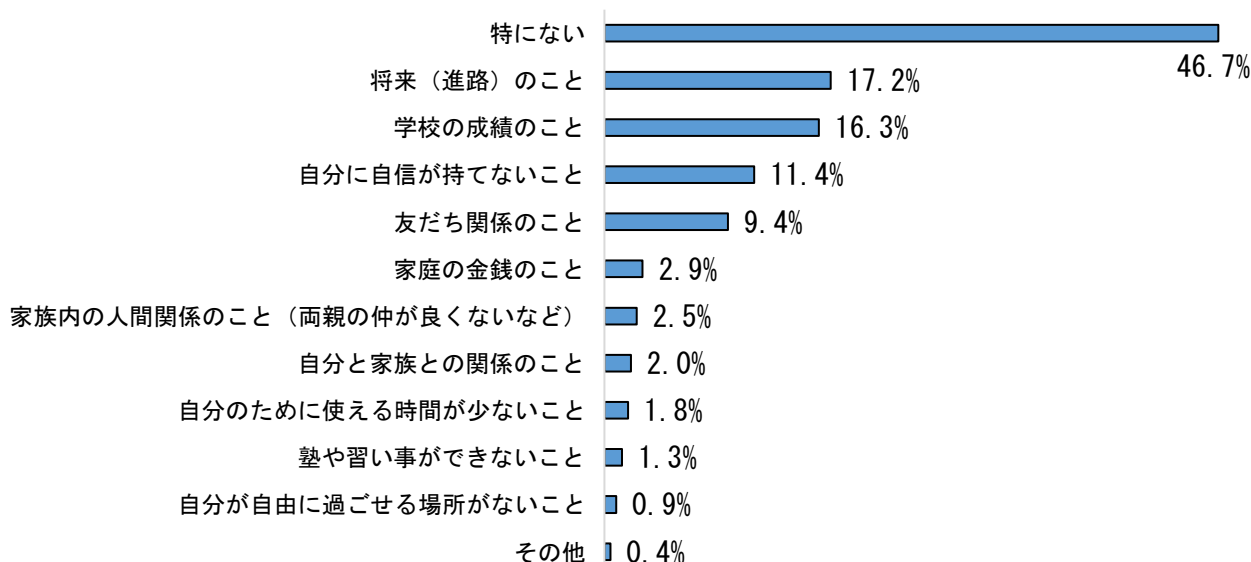
また、小中高校全体とヤングケアラーを比較すると、「将来（進路）のこと」においてが、小中高校全体の方が、ヤングケアラーよりも 11.1 ポイント高く、同様に「学校の成績のこと」が 10.2 ポイント高い結果になった。今回の調査ではヤングケアラーは、小中高校全体よりも、将来や学校成績のことを意識していないことが明らかになった。また、「自分に自身が持てないこと」では、ヤングケアラーの回答が小中高校全体よりも 3.8 ポイント上回った。

介護福祉学校を対象にした場合は、「特にない」が 50.0%と最も高く、「自分に自信が持てないこと」が 33.3%、「学校成績のこと」が 30.0%の結果になった。これを若者ケアラーに絞ると、3人全てに悩みごとがあると回答し、3人中2人（66.7%）が、「自分に自信が持てないこと」、「家庭の金銭のこと」、「将来（進路）のこと」、「友だち関係のこと」と回答し、ケアすることがヤングケアラーの生活問題につながっている可能性があることがわかった。

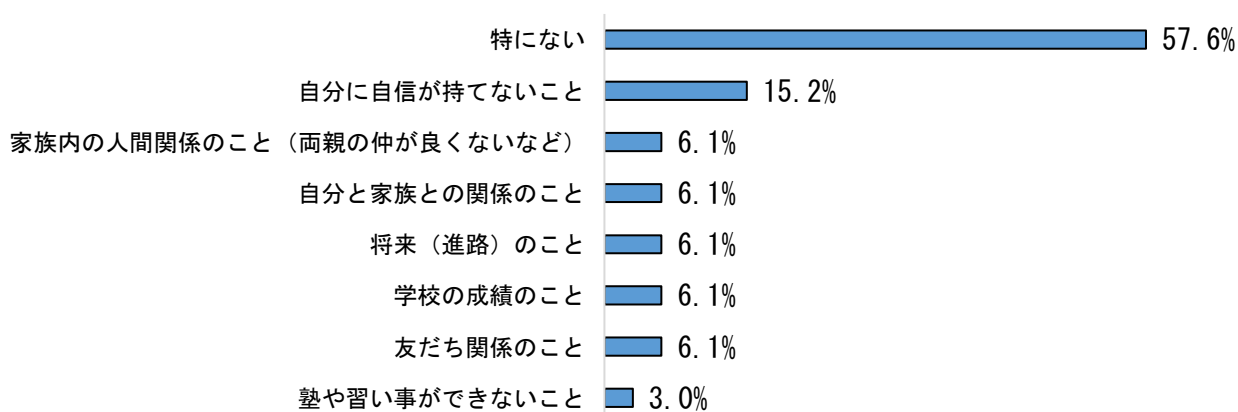
今回の調査結果では、ヤングケアラーの総数は、前回調査と比較し増加しているものの、前回調査と比べて、具体的な悩みごとや困りごとを認識しているまたは、問題は存在しているが気づいていない子どもが多い傾向にある。また、ヤングケアラー及び若者ケアラー双方とも、自分に対して自信を持つことができないケアラーが共通して多く、その点、その置かれている環境から、自己肯定感が低く、不安感が強いケアラーが一定数存在することが明らかになった。

*** 設問：普段の生活で悩んだり、困っていることはありますか。（複数回答）**

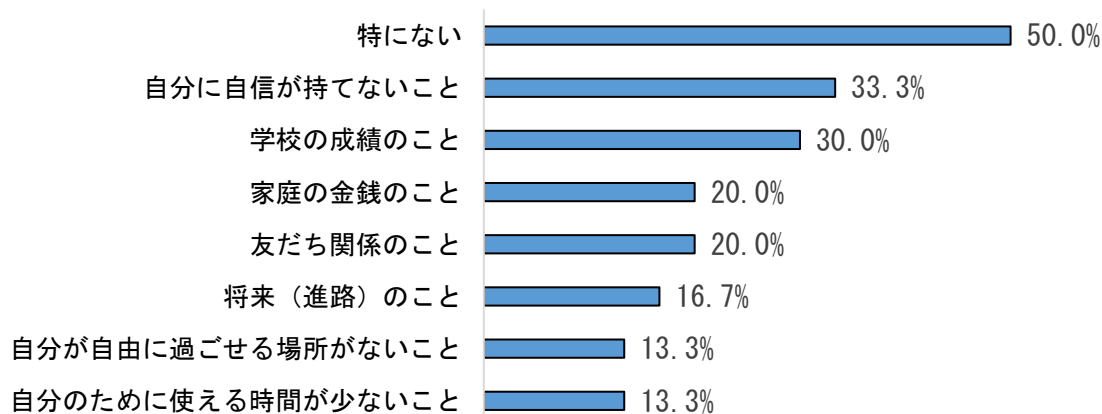
小中高校全体（N=448）



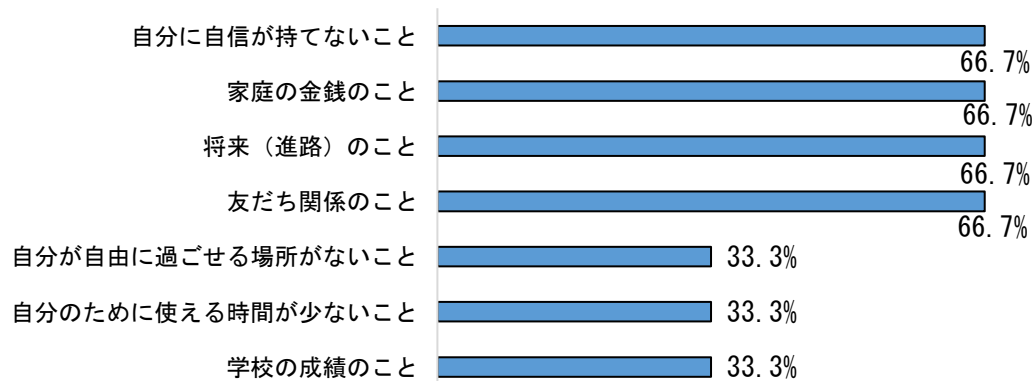
ヤングケアラー（n=33）



介護福祉学校（n=30）



若者ケアラー（n=3）

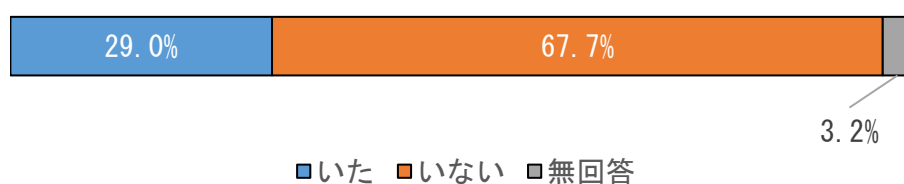


（１７）過去のケア経験

介護福祉学校の学生に、過去のケアの経験を尋ねたところ、お世話をしている人が「いた」と回答した者が、29.0%となり、3人に1人がケアの経験があることがわかった。なお、これを若者ケアラーに絞ると3人中2人（66.7%）がケアの経験があると回答した。

*** 設問：過去に家族の中で、あなたがお世話している人（高齢や病気、身体が不自由、きょうだいの面倒を見る）がいましたか**

介護福祉学校（n=30）



（１８）過去のケアでの困りごと・悩み事

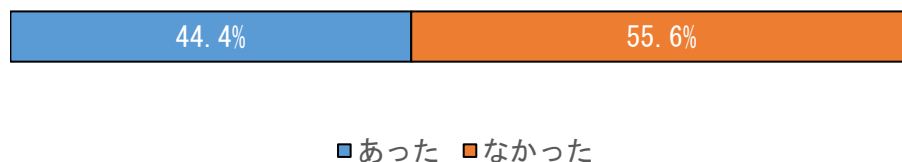
介護福祉学校の学生のうち、過去にケアを経験している回答者に、ケアをする上で悩みごとがあったかを尋ねると、44.4%の学生が「あった」と回答した。

具体的な内容としては、「亡くなった祖母が自宅に来てトイレ誘導、ご飯を作ったりと介護をしていた。施設や、病院にも行っていたがヘルパーになった。（在宅介護）（私が小４の頃に認知症になった）」という具体的なケアであったり、「若い妹達を私がまとめられるのか」というきょうだいの世話の悩み、「高３の時、コロナにかかった祖母、兄弟、母の世話をした」という新型コロナウイルス関連や、「家族のことだから誰に相談したらいいかわからないし、相談したところで何も変わらないと思い相談することができなく、一人で考えこむことが増えた」という相談方法がわからない、環境が変わらないという悩みなどの回答があった。

なお、若者ケアラーに対象を絞ると３人中２人（66.7%）が、困りごとや悩みごとがあったと回答しており、これまでの人生の中でも、そして今後ともケアに関する悩みごとを抱えている若者ケアラーが存在することがわかった。

*** 設問：過去に、家族の中で、あなたがお世話をする際に、困りごとや悩みごとがありましたか。「あった」と回答した人は、その内容を記入してください。**

介護福祉学校（n=9）

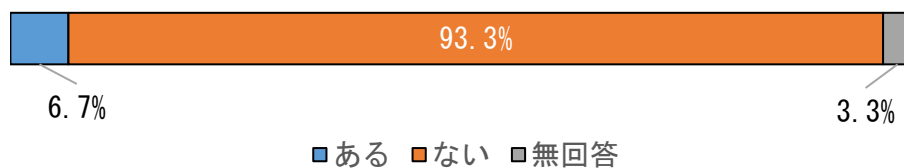


（１９）進学上の制限と相談先

介護福祉学校の学生のうち、家族のケアが理由で進学や就職が制限されることはあるか、制限される場合、そのことを周囲に相談することができているかを尋ねた。制限されることが「ある」と回答した者は、全体の 6.7%の結果になった。理由としては、「私は進学していますが、金銭的に多く悩みました」という経済的な問題や「祖母が高齢で一人にしたいくないため」という家族関係を心配することが進学に影響する回答があった。

これを若者ケアラーの対象を絞ると３人中１人が、制限があると回答した。また、そのことを周囲に相談したかを尋ねると、制限された回答者全てが、周囲に「相談した」と回答し、相談先は「家族」、「親類」、「学校の先生」という回答があった。

介護福祉学校 (n=30)



- * 設問：これから進学・就職するにあたり、家族のケアが理由で、進学・就職先が制限されることはありますか。「ある」と答えた方は、その理由を記入してください。
- * 設問：進学・就職するにあたり、家族のケアが理由で、進学先・就職先が制限されることを、周りに相談したことがありますか。「ある」と回答された方は、相談相手を教えて下さい。（○の数は自由です）

Ⅲ 分 析

分析に当たっては、島根大学法文学部法経学科宮本恭子教授により行われた、『栗山町ヤングケアラー二次分析結果報告書』（令和5年1月）の内容を参考にして分析を行った。

【 小学生 】

（1）ヤングケアラーについて、ヤングケアラーという言葉の認知度

ヤングケアラーは、ヤングケアラーという言葉で「聞いたことがあり、内容をよく知っている」4人（26.7%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」5人（33.3%）、「聞いたことがない」5人（33.3%）だった。ヤングケアラーでない児童（以下「非ヤングケアラー」という。）は、ヤングケアラーは、ヤングケアラーという言葉で「聞いたことがあり、内容をよく知っている」63人（39.1%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」38人（23.6%）、「聞いたことがない」55人（34.2%）だった。

「ヤングケアラー」は「非ヤングケアラー」を比べて、ヤングケアラーの認知度は低い傾向にある。

（2）ヤングケアラー15人は、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

お世話をしている人（複数回答）は、「きょうだい」12人（80.0%）、「祖父」2人（13.3%）、「母親」1人（6.7%）、「父親」1人（6.7%）であり、きょうだいをケアしているヤングケアラーが多い。

お世話をしている理由（複数回答）は、「きょうだい」で、「まだ、小さい（幼い）ため」が14人（93.3%）、「認知症のため」1人（6.7%）だった。年の離れているきょうだいを世話しているヤングケアラーが多い。

ケアしている年数は、「1年」3人（20.0%）、「2年」3人（20.0%）、「3年」4人（26.7%）、「4年」2人（13.3%）、「5年」1人（6.7%）になった。

ヤングケアラーの半数が3～5年の長期にわたってケアしていることがわかり、小学校低学年からケアに携わっていることがわかる。

（3）ケアすることによる影響

学習や生活面に影響のある児童は、11人（73.3%）になり、全体の70%強の児童の学習や生活面に影響が出ている。

ケアすることにより影響の出ている児童の属性では、家族構成（複数回答）で見ると、母親11人（100%）、父親7人（63.6%）、きょうだい11人（100%）祖母2人（18.1%）、祖父3人（27.3%）となり、ケアすることによる影響が出ている児童全てが母親ときょうだいがいる。

ケアをしている人は、きょうだいが10人（90.9%）、父親、母親、祖父がそれぞれ1人（9.1%）になった。理由（複数回答）としては、「まだ幼いため」が10人（100%）、「認知症のため」1人（9.1%）になり、すべての児童が幼いきょうだいの世話をしていることがわかる。

ヤングケアラーが学校の先生や周囲の大人に支援してほしいこと（複数回答可）は、「自分のいまの状況について話を聞いてほしい」、「家庭への金銭面での支援をしてほしい」がそれぞれ1人、6.7人でありヤングケアラー自身の心理面でストレスを抱えていることや、家庭の経済事情に関して困窮している可能性があることがわかる。

(4) ヤングケアラー予備軍（ヤングケアラーになる可能性が高い児童）

小学生におけるヤングケアラー予備軍は14人、全体に占める割合は8.7%である。ヤングケアラー15人と合わせると、全児童のうち18.0%の児童がヤングケアラーまたは、ヤングケアラーになる可能性が高い児童であることがわかる。これは、前回の調査と比べて5.4ポイント高い。

ヤングケアラー予備軍で、「お世話をすることに不安がありますか。」の質問については、「ある」と回答した者4人（28.6%）、「ない」と回答した者は、7人（46.7%）になった。ケアに対して不安を感じていない児童は約半数になる。

ヤングケアラー予備軍で、ケアをすることへの不安の内容（複数回答）は、「勉強する時間が取れなくなるのではないか」、「友だちと遊べないことがあるのではないか」、「自分の自由な時間が取れなくなるのではないか」、「何をしたいかわからない」、「これからどうなるのかよくわからない」がそれぞれ2人（14.3%）、学校を休んでしまうのではないか」1人（6.7%）になった。

前回の調査同様、ヤングケアラー予備軍の3割弱はケアに対しての不安を感じており、不安の内容は生活や学習のことなど多岐にわたった。

ヤングケアラー予備軍の児童で、ケアに不安を感じていない児童は、ケアをすることをどのように感じているかを、肯定的なイメージを持つ意見と否定的なイメージを持つ意見に分けると、5人中、肯定的なイメージは4人、否定的なイメージは1人となり、前回の調査同様、ヤングケアラー予備軍の児童であっても、ケアに不安を感じていない児童は、ケアをすることに概ね肯定的なイメージを持っているといえる。

ヤングケアラー予備軍の児童で、「普段の生活に悩みごとや困りごとがある」児童はどれくらいいるか（複数回答）をみると、「特にない」が9人（64.2%）と最も多く、「友だち関係のこと」と「自分に自信が持てないこと」が3人（21.4%）、「将来（進路）のこと」、「家庭の金銭のこと」、「家庭内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）」がそれぞれ1人（7.1%）となり、悩みや困りごとがないまたは、あっても気がつかない児童が半数以上になるが、一方で普段の生活に悩みがある児童も一定数いることがわかった。

【 中学生 】

(1) ヤングケアラーについて、ヤングケアラーという言葉の認知度

ヤングケアラーは、ヤングケアラーという言葉で「聞いたことがあり、内容をよく知っている」4人（23.5%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」5人（35.3%）、「聞いたことがない」5人（35.3%）だった。

非ヤングケアラーでは、ヤングケアラーという言葉で「聞いたことがあり、内容をよく知っている」77人（34.8%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」97人（43.9%）、「聞いたことがない」34人（15.4%）だった。

「ヤングケアラー」は「非ヤングケアラー」を比べて、ヤングケアラーの認知度は低い傾向にある。

(2) ヤングケアラー17人は、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

お世話をしている人(複数回答)は、「きょうだい」11人(64.7%)、「祖母」2人(11.8%)、「母親」、「父親」、「祖父」それぞれ1人(5.9%)であり、きょうだいをケアしているヤングケアラーが多い。

お世話をしている理由(複数回答)は、「きょうだい」で、「まだ、小さい(幼い)ため」が10人(58.8%)、「身体や心に障がいがあるため」、「病気やけがのため」がそれぞれ2人(11.8%)、「高齢(65歳以上)のため」1人(5.9%)だった。年の離れているきょうだいを世話しているヤングケアラーが多い。

ケアしている年数は、「2年」4人、23.5%、「3年」、「5年」それぞれ3人、17.6%、「1年」、「4年」、「7年」、「9年」がそれぞれ1人、5.9%になった。

ヤングケアラーが3～9年の長期にわたってケアしているヤングケアラーが58.8%になり、ケアが長期化している。就学前からケアに携わっているヤングケアラーもいることがわかる。

(3) ケアすることによる影響

学習や生活面に影響のある生徒は9人(52.9%)になり、半数の生徒の学習や生活面に影響が出ている。

ケアすることにより影響の出ている生徒の属性では、家族構成(複数回答)で見ると、母親9人、(100%)、父親8人(88.9%)、きょうだい7人(77.8%)、祖母2人(22.2%)、祖父1人(11.1%)となり、ケアすることによる影響が出ている生徒全てに母親がいる、また、父親ときょうだいとの同居率も高い。

ケアをしている人は、きょうだい6人(66.7%)、父親、祖父がそれぞれ1人(11.1%)になった。理由(複数回答可)としては、「まだ幼いため」が5人(55.6%)、「身体や心に障がいがあるため」、「病気やけがのため」がそれぞれ1人(11.1%)になり、半数の生徒が幼いきょうだいの世話をしている、父親や祖父は障害や病気・けがを理由にしていることがわかる。

ヤングケアラーが学校の先生や周囲の大人へ支援してほしいこと(複数回答)は、「家族での相談や話し合いのときにいっしょに参加してほしい」、「学校の勉強や受験勉強などの学習をサポートしてほしい」がそれぞれ1人(5.9%)になった。

これは、ヤングケアラーが抱えている悩みを家族にも話すことができずに、一人で抱え込んでいる可能性があるのと、学習面でのニーズが高まる可能性があると考えられる。

(4) ヤングケアラー予備軍(ヤングケアラーになる可能性が高い生徒)

中学生におけるヤングケアラー予備軍は22人、全体に占める割合は10.0%である。ヤングケアラー17人と合わせると、全生徒のうち17.6%の生徒がヤングケアラーまたは、ヤングケアラーになる可能性が高い生徒であることがわかる。これは、前回の調査と比べて1.5ポイント高い。

ヤングケアラー予備軍で、「お世話をするに不安がありますか。」の質問については、「ある」と回答した者6人(27.3%)、「ない」と回答した者は、13人(59.1%)になった。ケアに対して不安を感じていない生徒は約60%になる。

ヤングケアラー予備軍で、ケアをすることへの不安の内容(複数回答)は、「何をしたいかわからない」、「これからどうなるのかよくわからない」がそれぞれ3人(13.6%)、「眠る時間が取れなくなるのではないかと」、「友だちと遊べないことがあるのではないかと」がそれぞれ2人(9.1%)、「学校を休ん

でしまうのではないか」、「学校を遅刻・早退してしまうのではないか」、「習い事が思うようにできなくなるのではないか」、「自分の自由な時間が取れなくなるのではないか」、「親やきょうだいが忙しくなるのではないか」がそれぞれ1人（4.5%）になった。

ヤングケアラー予備軍の30%弱はケアに対しての不安を感じており不安の内容は生活や学習のことなど多岐にわたった。これは、前回の調査と比べて、22.7ポイント低い。

ヤングケアラー予備軍の生徒で、ケアに不安を感じていない生徒は、ケアをすることをどのように感じているかを、肯定的なイメージを持つ意見と否定的なイメージを持つ意見に分けると、11人中、肯定的なイメージは6人、否定的なイメージは5人となり、前回の調査とは異なり、ヤングケアラー予備軍の生徒では、ケアをすることに対して、肯定的なイメージと否定的なイメージを持つ者がそれぞれ半数になることがわかった。

ヤングケアラー予備軍の生徒で、「普段の生活に悩みごとや困りごとがある」生徒はどれくらいいるか（複数回答）をみると、「特にない」が7人（31.8%）と最も多く、「学校の成績のこと」、「将来（進路）のこと」がそれぞれ4人（18.2%）、「自分に自信が持てないこと」が2人（9.1%）、「友だち関係のこと」、「家庭の金銭のこと」、「家庭内の人間関係のこと（両親の仲が良くないなど）」、「自分のために使える時間が少ないこと」がそれぞれ1人（4.5%）となった。

悩みや困りごとがないまたは、あっても気が付いていない生徒が30%強と比較的多いものの、悩み事は普段の生活や家庭内の人間関係や経済事情など悩みが多岐にわたることがわかった。

【 高校生 】

（1）ヤングケアラーについて、ヤングケアラーという言葉の認知度

高校生のサンプル数における、ヤングケアラーは66人中1人だった。ヤングケアラーは、「聞いたことがあるが、よく知らない」と回答している。

非ヤングケアラーでは、ヤングケアラーという言葉に「聞いたことがあり、内容をよく知っている」27人（40.9%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」23人（34.8%）、「聞いたことがない」10人（15.2%）だった。

（2）ヤングケアラーは、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

ヤングケアラーは、お世話をしている人（複数回答可）は、「きょうだい」をケアしていると回答し、お世話をしている理由（複数回答可）は、「まだ、小さい（幼い）ため」と回答した。ケアしている年数は、「4年」と回答している。

（3）ケアすることによる影響

ヤングケアラーは、学習や生活面に影響のあると回答し、その属性では、家族構成（複数回答可）で見ると、母親、父親、きょうだいになった。

ヤングケアラーが学校の先生や周囲の大人へ支援してほしいことは、「特にない」と回答している。

（４）ヤングケアラー予備軍（ヤングケアラーになる可能性が高い生徒）

高校生におけるヤングケアラー予備軍は 7 人、全体に占める割合は 10.6%である。ヤングケアラー 1 人と合わせると、全生徒のうち 12.1%の生徒がヤングケアラーまたは、ヤングケアラーになる可能性が高い生徒であることがわかる。これは、前回の調査と比べて 1.6 ポイント低い。

ヤングケアラー予備軍で、「お世話をすることに不安がありますか。」の質問については、「ある」と回答した者 3 人（42.9%）、「ない」と回答した者は 4 人（58.1%）になった。ケアに対して不安を感じていない生徒は約 40%になる。

ヤングケアラー予備軍で、ケアをすることへの不安の内容は、「親やきょうだいが忙しくなるのではないか」、「自分の自由な時間が取れなくなるのではないかと」、「眠る時間が取れなくなるのではないかと」、「勉強する時間が取れなくなるのではないかと」、「何をしたいかわからない」、「これからどうなるのかよくわからない」がそれぞれ 1 人（14.3%）になった。

ヤングケアラー予備軍の約 40%はケアに対しての不安を感じており、小学生、中学生と比べ最も多く、不安の内容は、生活や学習のことなど多岐にわたった。

ヤングケアラー予備軍の生徒で、ケアに不安を感じていない生徒は、ケアをすることをどのように感じているかを、肯定的なイメージを持つ意見と否定的なイメージを持つ意見に分けると、7 人中、肯定的なイメージはなく、否定的なイメージは 3 人、肯定も否定もしない意見が 3 人、無回答 1 人となり、否定的なイメージを持つ者が約 40%になることがわかった。

ヤングケアラー予備軍の生徒で、「普段の生活に悩みごとや困りごとがある」生徒はどれくらいいるかをみると、「特にない」が 3 人（42.9%）と最も多く、「学校の成績のこと」、「将来（進路）のこと」、「友だち関係のこと」がそれぞれ 2 人（28.6%）となった。

悩みや困りごとがないまたは、あっても気が付いていない生徒が 40%強と多い。また。学習面や進路の悩みを持つ者が一定数いることがわかった。

【 介護福祉学校 】

（１）ヤングケアラーについて、ヤングケアラーという言葉の認知度

若者ケアラー、被若者ケアラーすべてにおいて、ヤングケアラーの言葉を「聞いたことがあり、内容も知っている」と回答している。

（２）若者ケアラー3人は、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

お世話をしている人（複数回答）は、「祖母」2 人（66.7%）、「母親」、「きょうだい」がそれぞれ 1 人（33.3%）だった。

お世話をしている理由（複数回答）は、「祖母」で、「小さいため」が 2 人（66.7%）、「身体や心に障がいがあるため」、「病気やけがのため」がそれぞれ 1 人（33.3%）。だった。

ケアしている年数は、「4 年」2 人、「9 年」1 人と回答した。長期にわたってケアしている。

(3) ケアすることによる影響

若者ケアラーのすべてが、学習や生活面に影響のある学生になった。

ケアすることにより影響の出ている学生の属性では、家族構成（複数回答）を見ると、母親ときょうだいのケース、祖母との同居のケース、学生寮での生活になり、単身で生活するも、家族支援を行わなければならない状況の学生がいることがわかる。

若者ケアラーが学校の先生や周囲の大人へ支援してほしいこと（複数回答）は、「自由に使える時間が欲しい」、「自分の自由に過ごせる場所がほしい」が3人（100%）であり、「家族のお世話について相談にのってほしい」、「家族での相談や話し合いのときに一緒に参加してほしい」、「進路や就職など将来の相談にのってほしい」「学校の勉強や受験勉強などの学習をサポートしてほしい」、「家族への金銭面での支援をしてほしい」がそれぞれ1人（33.3%）になった。

これは、若者ケアラーは時間的制約があり、そのことへのストレスを抱えている可能性を示唆するとともに、学習面や進路において悩みを抱えていることがわかる。

(4) 若者ケアラー予備軍（ヤングケアラーになる可能性が高い学生）

介護福祉学校における若者ケアラー予備軍は4人、全体に占める割合は23.3%である。若者ケアラー3人と合わせると、全学生のうち33.3%の学生が若者ケアラーまたは、若者ケアラーになる可能性が高い学生であることがわかった。

若者ケアラー予備軍で、「お世話をすることに不安がありますか。」の質問については、「ある」と回答した者3人、75.0%、「ない」と回答した者は、1人、25.0%になった。

ヤングケアラー予備軍で、ケアをすることへの不安の内容（複数回答）は、「学校を休んでしまうのではないか」、「勉強する時間が取れなくなるのではないか」、「友だちと遊べないことがあるのではないか」、「自分の時間が取れなくなるのではないか」、「親やきょうだいが忙しくなるのではないか」、「何をしていいかわからない」、「これからどうなるのかよくわからない」がそれぞれ1人になった。

若者ケアラー予備軍は、ケアに対しての不安を感じており、その内容は生活や学習のことなど多岐にわたった。

若者ケアラー予備軍の学生で、ケアに不安を感じていない生徒は、ケアをすることをどのように感じているかを、「特にない、専門職としてやるのはあたりまえ」と回答している。

若者ケアラー予備軍の学生で「普段の生活に悩みごとや困りごとがある」学生はどれくらいいるか（複数回答可）をみると、「友だち関係のこと」、「特にない」が2人、「学校の成績のこと」、「将来（進路）のこと」、「自分に自信が持てないこと」、「自分のために使える時間が少ないこと」、「自分が自由に過ごせる場所がないこと」がそれぞれ1人となった。

5. まとめ

ヤングケアラーは、町内で 33 名、小学生で 9.3%、中学生で 7.6%、高校生で 1.5%という結果になった。総数は前回の調査よりも高い。小中高校生で、ヤングケアラー予備軍は、小学生で 18.0%、中学生で 17.6%、高校が 10.6%と小中学生がケアを担っている、担う可能性が高い状況であることが分かった。小学生では前回の調査よりも 5.4 ポイント高い。しかし、今回の調査におけるヤングケアラーとその予備軍の総数と割合は回答者 448 人中 76 人、17.0%に対して、前回調査では、回答数が 435 人中 62 人、14.3%と 2.7 ポイント高く、前回調査と比べて 18.9%の上昇率に対して、ヤングケアラーの上昇率は、前回調査 21 人であり、57.1%の上昇率と、上昇率に大きな差異を認めることができる。ヤングケアラーの認知度が低下している傾向がある点を評価すると、単純に、ヤングケアラーとしての可能性がある子どもが増えたと評価するか、子どもたちが誤った認識で調査回答を行ったかを見極めるには、対象の子どもたちをより個別的に状況の把握を行い、より慎重に判断する必要がある。

また、小学生では低学年から、中学生では就学前からケアを担う者がいるため、前回の調査同様、小さい子だからケアをしないということではなく、どの学年でも常にケアをする子どもがいるという視点は、引き続き持たなくてはならない。

現ヤングケアラーで、学習や生活面に影響が出ている子どもは、小学校で 73.3%、中学校で 52.9%になり、半数以上の子どもの影響が出ていると回答している。また、大人に対して支援を求める内容は多岐にわたるが、「自分の今の状況について話を聞いてほしい」や「家族での相談や話し合いのときに一緒に参加してほしい」と、一人で悩みを抱え込んでいる可能性もあり、個別に状況を把握する必要がある。

ヤングケアラー予備軍の子どもは、「何をしたいのかわからない」「これからどうなるかわからない」と回答する子どもが多く、漠然とした不安に対して、その不安感を支援者側が受け止めることや、具体的にイメージを子どもたちが持つことができるよう学習面や、生活面でサポートすることが重要である。

ヤングケアラー予備軍のうちケアに不安を感じていない子どもは、小学生の場合、ケアをすることに肯定的なイメージを持っている者が多いが、中学校、高校と年齢を重ねるにつれ、否定的なイメージを持つ傾向が強いため、学校のステージごとに病気や、障がいや介護に関しての正しい知識と、理解を育み、ライフステージごとに、その内容を深めることで、ケアをすることやヤングケアラーへの偏見につながらないような学習を行うことが、一層求められる。本年実施したヤングケアラー出前講座を始めとした周知啓発活動や、各学校での自主的なヤングケアラー理解・支援の取組み、必要時の個別相談・支援が有効と思われる。

介護福祉学校では、介護福祉の専門学校という特殊性を考慮しながらも 10 人に 1 人が若者ケアラーの対象になり、若者ケアラー予備軍を含めると 3 人に 1 人が若者ケアラーまたは、その可能性がある学生になった。

若者ケアラー全てが、生活・学習面に影響があると回答した。予備軍を含めて将来のケアに不安を抱えていることから、介護福祉士として自分自身の仕事に誇りと自信を持てるよう、学習面でのサポートはもとより、学校全体での相談体制などを充実させることが重要である。

